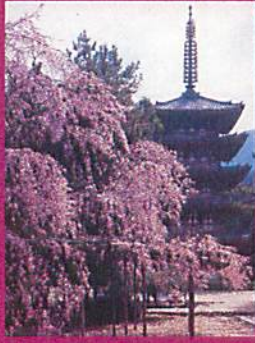


倶楽部

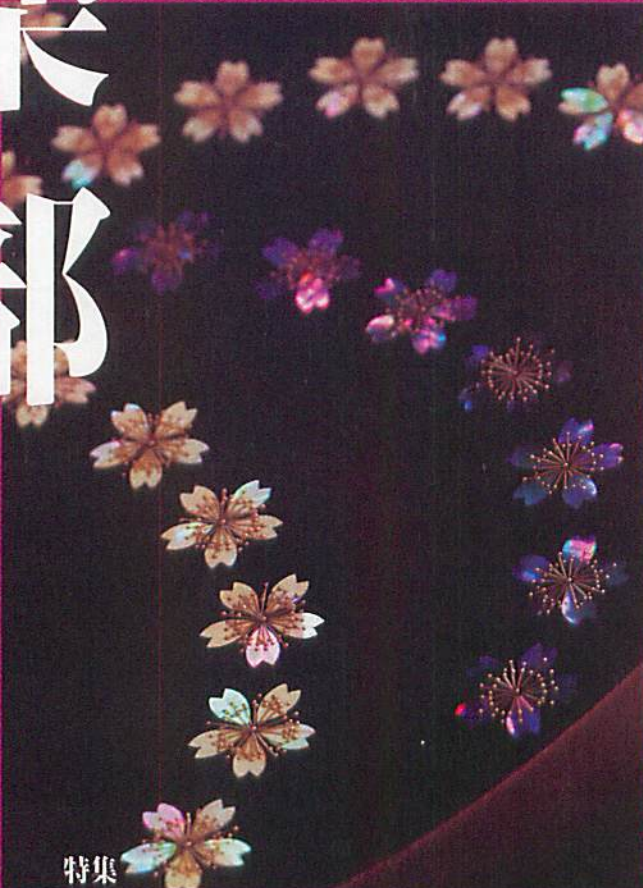


匠

講談社MOOK

春号

京都



特集

春爛漫匠の技



桜、春の愛で方、
楽しみ方
艶やか京焼、
京のエレガンス

舞傘 満天桜

日吉屋

「和傘」
骨となる竹を40本に割り、天ロクロに親骨を固定。軸を上下する下ロクロに子骨をつけ糸で結ぶ。傘布の部分は親骨に和紙を貼って乾かし、屋外で使うものは防水の油を塗る。

雨よけ、野点（のだて）、舞踊、装飾と和傘の用途は広く、それぞれに作り方が変わってくる。防水加工がされていないこの舞傘は和日傘としても使われる。和紙を透けてさす穏やかな光に、桜吹雪の文様。ぱっと開いただけで、その名の通り「満天桜」の下を散歩しているような気分だ。赤6300円。

■日吉屋■

京都でただ一軒、伝統の京和傘を作り販売する工房兼ショップ。飾りから実用までの和傘が並ぶ。店には傘だけでなく、京都の伝統工芸品を扱うセレクトショップもある。☎075・441・6644



伸縮性のない生地を足に添わせる足袋は、繊細な型どり、縫いの仕事で作られる。棉生地をはかねでたち、一つ一つをミシンで縫製。職人が伝えられている京都では誂（あつら）えにも対応できる店が残る。

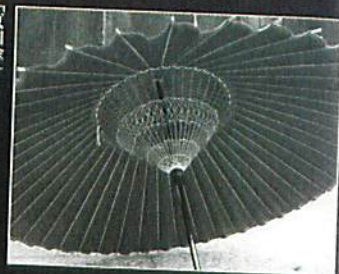
友禅染めの生地を使った「友禅足袋」は、色遣いのはんなりした足袋。モダンに見えて、実は創業の江戸時代末期から作られている人気商品だ。着物のお洒落の一部として足もとに春を装う。桜の柄は写真のネズミ色、ピンク色の他、朱色もある。3600円〜。

■分銅屋■

三条通りにある風情ある店は、玄関に見世の間がある、昔ながらの商家の造り。店の奥で職人がミシンを踏んでいる。試着をしながら、様々なサイズからびつたりのものを探すこともできる。☎075・221・2389

友禅足袋 桜

分銅屋



「京和傘」
竹とろろ竹を削り、まず大ロクロにつけた和紙を、軸でスライドする下ロクロにつけた小竹とを糸で結んで開閉の仕組みを作る。その後、親竹の上に和紙を貼って乾かし、鯨腹に折りたんで仕上げる。

紙越しに透ける光
和傘の情緒を部屋の中で楽しむ
和みとモダンの照明

日吉屋

「日吉屋」京都市上京区寺之内通
堀川東入ル百々町546 ☎07
54416644 ☎101100
20:00 (※月曜) MAP04b-1

和傘照明 古都里



「唐傘」の語源を、「からくりの傘」とする説があるそうだ。軸を上下する下ロクロで、和紙を貼った骨を開閉させる仕組みは、登場した当時、相当なハイテクだっただろう。

「日吉屋」は雨傘、舞傘、日傘、野点のぼりの傘までを手がける、ただ一軒の京和傘専門店。5代目当主の西堀耕太郎氏は、「和傘の技術で生活の中に溶け込むものを」と照明の製作に取り組んだ。紙越しに透ける光を楽しむのも和傘の情緒。傘と提灯ちていとは兼業で製作されてきた歴史もあり、素材、技術も似ている部分がある。

試行錯誤の末、本来一つあるロクロを一つにしてみた。すると、傘が放射状のフォルムから解放された。規則正しく垂直に竹骨が並ぶ、和傘の美しさを残したシェードがこうして誕生した。イサム・ノグチが50年代に発表した和紙のシェード「AKARI」は、今や和の照明のマスターピースとして広く知られている。京和傘生まれの照明「古都里」もまた、世界に和傘照明の灯りを広げたい。

京和傘同様、ロクロ職人、和紙職人、傘職人の分業均質に仕上げられるよう木型を開発した。白、赤、黒紫があり、白は格子模様、光が透ける半朝紙、色紙は五箇山和紙を使う。6万900円(直径310ミリ)。

